

2006年2月17日

環境・生命工学専攻	学籍番号	987653
申請者氏名	LIM IV	

指導教員氏名	廣島 康裕 渡邊 昭彦 大貝 彰
--------	------------------------

論文要旨 (博士)

論文題目	地方都市における平休日交通行動の経年変化とその構造的要因に関する研究
------	------------------------------------

近年、多くの地方都市では、モータリゼーションの進展や住宅開発・大型商業施設の郊外進出などにより道路混雑の慢性化、中心市街地の空洞化や都市集積の相対的な低下が進んでいる。また、高齢化の進行や女性の社会進出の増加などにより、交通主体の属性も大きく変化している。都市交通計画では、このような都市構造と交通主体の経年的構造的な変化に伴う人々の時間的空間的な交通行動の変化に対応した望ましい交通体系を確立することが求められていることから、今後の現実的な交通計画の立案に際しては一時点での交通実態分析だけでなく、経年変化の動向を把握することがより重要であると考えられる。

また、従来の都市交通計画は主として通勤通学や業務といった平日における定型的な交通を考慮して立案されることが多かったが、近年の人々の生活構造の変化や余暇時間の増大によって買物、レジャーなどの自由目的活動のための交通が活発化し、それに付随する各種交通問題が休日を中心に顕在化するようになり、都市交通計画において休日交通にも対応することの必要性が高まってきている。これに伴い、休日の自由目的交通について分析や予測モデル構築を行うことの重要性は増大しているが、自由目的活動が非定型的で個人による意思決定の自由度が大きいことを考えるとき、平日の自由目的交通に関するものをも含めこれまでの研究の蓄積は必ずしも十分でなく、さらに詳細な研究が必要である。

そこで、本論文では今後の社会経済構造の変化をより反映した次世代型交通需要予測法の確立を目指して、豊橋市を分析対象として簡易調査を含む過去4時点分(1977, 1991, 1992, 2001)のパーソントリップ調査データを用いて、各PT調査における調査方法の違いを配慮しつつ、平日のみでなく休日も含めた交通実態の経年変化動向を定量的に把握するとともに、その構造的要因を分析し、人々の時間的空間的な交通行動の変化について考察している。具体的には、まず今後の都市交通計画の策定においては事実の蓄積も重要であると考え、平休日の交通行動の経年変化実態について述べる。次に、生成原単位、交通手段分担率、トリップ空間分布などの交通行動特性を取り上げ、それぞれの経年変化量を要因別交通行動特性の経年変化によるものと、要因構成自体の経年変化によるものとに分解して定量的に把握する。さらに、同一個人が平日と休日に行った自由目的活動を同時に着目して、複数時点のデータに対して構造方程式モデルを適用することにより平休日間の相互関係を考慮した自由目的交通の生成構造とその経年変化について考察する。